

仙台・宮城における地震と津波の歴史



地層に見る歴史

杓形遺跡(弥生時代)

仙台市若林区荒井にある杓形遺跡の発掘調査では、津波で運ばれた砂で埋まった弥生時代の水田が発見されている。遺跡は現在の海岸線から約4km内陸、当時の海岸線からは約2km内陸の位置にある。この津波では当時の海岸から2km以上先まで浸水したことになる。

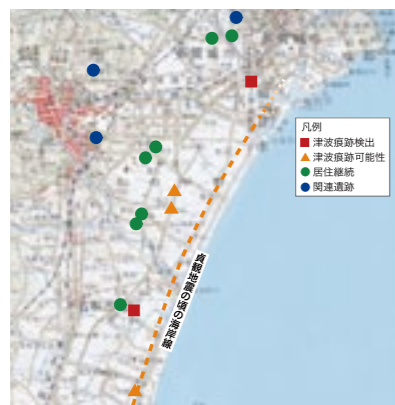


杓形遺跡の位置 (東北学院大学提供)

貞観地震・津波(平安時代)

貞観11(869)年5月26日、東北地方太平洋沿岸を、巨大な地震と津波が襲った。当時の歴史書『日本三代実録』には、大地に亀裂が入り、津波で1,000人以上の死者が出たことが記されている。

近年の調査研究によると、仙台平野の海岸では、当時の海岸線から2km前後浸水したという結果も出ている。



仙台平野沿岸部における貞観津波の検出遺跡 (仙台市博物館「土と文字が語る仙台平野の災害の記憶」をもとに作成)

慶長三陸地震と津波

「津波」の言葉が使われた書物



『駿府政事録』11月晦日条(東北大学附属図書館所蔵)

徳川家康の行動を記録した『駿府政事録』11月晦日条には、1611年の慶長三陸地震のことが記されている。伊達政宗領内で大きな波が来て海沿いの家屋が流失した、溺死者は5,000人ほどいた、これが津波というもののだなどと読みとれる。なお、仙台藩の正史『貞山公治家記録』には溺死者1,783人と記載がある。

仙台藩の開発と震災

慶長16(1611)年10月、慶長三陸地震津波が発生したとき、伊達政宗は有能な人材を仙台藩に呼び集め、地域開発事業を展開している最中だった。名取川と阿武隈川をつなぐ運河「木曳堀」(現在の貞山堀の一部)、津波被害を受けた地域での「製塩事業」、燃料としても利用できる黒松の「海岸林植樹」、武士と農民が協力して整地する「新田開発」といった事業が政宗の没後も進められた。



現在の貞山堀 (若林区荒浜より名取方面を望む)

繰り返す地震

宮城県沖では、マグニチュード7.1以上のプレート間地震が繰り返して発生してきた。震源位置などから、1897年、1930年代(1933、1936、1937)、1978年、2010年前後(2005、2011)の地震活動をそれぞれ一つの活動とした場合、平均発生間隔は約38年となっている。そのほか、宮城県沖地震が三陸沖南部海溝寄りの震源域と連動するタイプの地震や、長町一利府線断層帯の活動による地震の可能性も指摘されている。



次の災害に備える

仙台市地震防災アドバイザー
針生勝広 (左は防災まさむね君)

仙台はこれまで、地震や津波、水害、土砂災害など、さまざまな自然災害に見舞われてきました。いつどこで起こるか分からないからこそ、災害への備えはこれからもずっと続けていく、生活そのものと言えます。

各家庭では、非常持ち出し袋の用意や、ハザードマップ等による避難経路・避難所の確認をしましょう。また、防災訓練や地域のイベントに参加し、隣近所の方々と顔の見える関係を作ることも重要です。皆さんも今一度、身の回りの備えを振り返ってみましょう。

防災・減災チェックポイント!

□自宅や家の周りの安全性を確認

家具や家電製品などの転倒防止対策をしましょう



□家庭内での食料・水などの備え

食品や飲料水は、家族構成に合わせて1週間程度の備蓄をしましょう



□家族の安否確認の方法など

家族で非常時の連絡方法を話し合っておきましょう

□地域での備えや助け合い

普段から近所同士で声を掛け合い、「顔の見える関係」をつくっておきましょう

伝承される災害の記憶

◆浪分神社 (若林区)

仙台平野には、津波にまつわる伝承が、いくつか残されている。仙台市若林区霞目にある浪分神社も、その一つである。津波で多くの溺死者が出た際、白馬にまたがった海神が現れて波を二分して鎮めたことから、こう呼ばれるようになったと伝わる。以前は、現在地より500mほど東にあったが、1835年に現在地に移されたという。



◆蛸薬師 (太白区)

蛸薬師堂は仙台市太白区长町にあり、薬師瑠璃光如来を本尊としている。水害の時、この薬師如来像に蛸が付着して流れ着いたという言い伝えがあり、それ以来この像を蛸薬師と呼ぶようになったと言われている。

